

田畑をふやすために……かんがい用水をつくった人々

【栗村ぜき】（今の栗村ぜき頭首工水路）

今から700年前ごろ、栗村（今の坂下の柳町にある定林寺付近）は、水の便が悪く、田畑や家も少ないさびしい村でした。

1331年（元弘元年）栗村盛満という人が鶴沼川から水を引き入れ、水田



栗村ぜき（新鶴村和泉新田地内）

を開こんするためにせきを掘り始め、子から孫へと三代引きついで、工事を完成させました。

せきができてからは新田の開発がさかんになり、つぎつぎと田畑が開かれて新しい村ができました。「新田」、「新村」などという地名のところはそのころ開かれた村です。

それから長い間に大洪水などによって川の流れがかわったり、せきがこわされたりしましたが、1563年（永禄6年）から1570年（元亀元年）に改修されて今日にいたっています。

現在の水路は新鶴村の和泉新田の近くの鶴沼川から水を取り入れ、若宮地区の東がわより坂下町の南側をまわり、八幡、川西地区まで流れています。水路の長さは13kmにもおよび、およそ780ヘクタールの水田をうるおしています。

【富川加水ぜき】（今の富川頭首工水路） 今から450年前ごろまで金上地区の東側や広瀬地区の東側は、鶴沼川より高台になっていて、水不足に悩んでいました。そして、村も小さくなってしまいました。